

文書館

生活ノオト

「音」で読み解く
防長の歴史

15

「九州方面修学旅行日記」（香原家文書22）

生活ノオト⑦

旅と音 ～旅日記に見る風景と音～

【旅のたのしみ】

社寺参詣を主な目的とした旅は、江戸時代に入って庶民にも浸透し、盛んになりました。明治時代以降、静養文化の流入と鉄道網の広がりにより、教養を深めるため、あるいは余暇を楽しむため、旅の目的は多様化しました。

移動手段の変化は旅の速度と可能性に大きな変化をもたらしました。とはいえ、現代のような高速交通機関はなく、往来には時間がかかります。道中の景色や土地ごとの風俗も旅の楽しみの重要な要素でした。

旅にあたっては、記録を作成する人も少なくありませんでした。内容には個人差がありますが、行程や支出にはじまり、道中の景色風物や風説、創作した短歌や俳句まで、さまざまなものが記録されました。

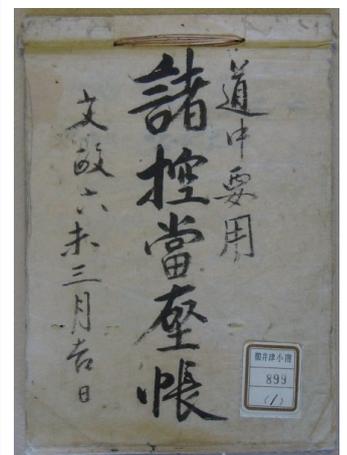
右のコラム写真は、江戸時代に作成された旅の記録のひとつです。当時の萩藩内の人びとの行き先としては、上方や九州が多かったようで、資料からは寺社参詣のついでに城や屋敷の見物、町々で行われる芝居や浄瑠璃などの興行も楽しんでいただことがうかがえ、音まで聞こえてくるようです。

【修学旅行と日記】

教員が学生を引率する旅行の始まりは、明治15年(1882)の栃木第一中学校(現栃木県立宇都宮高等学校)による、上野公園で開催された第2回内国勧業博覧会の見学旅行といわれています。その後の教育改革により行軍旅行が学習課程に盛り込まれ、明治20年頃から学術研修を兼ねた旅行として「修学旅行」の名称が使われていきました。

このような学校行事は、作文(綴方)の授業の格好の題材として、日記の作成、提出が求められることが多かったようです。

上写真は明治43年に福岡で開催された地方博覧会、第13回九州沖縄共進会に合わせ、5月3日から3泊4日の旅程で行われた山口中学校(現山口県立山口高等学校)の修学旅行にあたり書かれた日記です。授業の一環として作成されたものらしく、教員による添削や総合評価「意達文亦可観」(意達し文亦た観るべし、訳：意味が通っており、表現にもまたみるべきものがある)が朱筆で書き込まれています。



「道中要用諸控当座帳」
(小田家文書(柳井市金屋)899)

文政6年(1823)、現在の柳井市で町年寄などを務めていた商家の人物が、博多や太宰府、熊本、阿蘇を経て島原、長崎、唐津などを巡った後、萩、山口に立ち寄って柳井に戻るまでの道中の記録です。

全文が当館ウェブサイト内の古文書実践講座のページで公開されています。

【旅程と記述】

「九州方面修学旅行日記」の筆者は、道中の景色にも興味を持って接し、書き留めています。本文より、当時の中学生が感じた旅中の音を、風景描写と共に紹介します。

1日目：山口～香椎～箱崎～博多

- ①山口駅発
家をも山を野も尚ほ温き夢を結びてか眠れるが如く、只聞ゆるは轟々として絶間なき車輪の音のみ。
- ②黒川堤
…かしここの家々よりからからと雨戸開く音聞ゆ。朝食たか、山の辺の賤が家に立ち上る煙いとしづかなり。
- ③小郡駅発
汽車は勢よくも黒煙をはきつつ小郡駅を後にして、西へ西へと…
- ④下関～関門海峡～門司
…九州を始めとし海外諸国への交通の要路にあたるを以てか、上下する客殊に多かり。…遠く日本海の方より吹き来る風颯々として袂をはらひ、波舷を打ちて水煙八方に飛び散る勢にて、かしこには黒煙吐く大船の荒波蹴立てて西の方に行くよと見るや、幾艘も幾艘も連り続きたる帆船の彦島影【かげ】より現はれて、悠々と風に任せて進むもあり、…
- ⑤香椎宮
境内大樹老木鬱蒼と生ひしげり、頗る神仙の【々しき】地なり。
- ⑥箱崎町付近
一望涯みなく黄金色の絨氈をしきつめたるが如く芳香軟風のまにまに鼻に【身辺】迫り、雲雀は此の好景をわがもの【がほ】にせんと中空に囀る。嗚呼春は長閑なり。
- ⑦東公園
閑静の別天地、当地【山口】亀山の如きと比すべくもあらず、…
- ⑧共進会（夜）
余興場に到れば…みなそれぞれの装飾を施し、見物人各会場に満つ。…市街の繁盛なるを覩て帰途につく。

2日目：共進会、西公園

- ⑧共進会（昼）
…獅子の吠え声にひかされて動物会に入る。
- ⑨西公園
今松吹く風穏かに磯打つ波静かなり。

3日目：太宰府周辺

- ⑩水城跡
水城の跡を見て懐旧の情車輪と共に回転し、…
- ⑪太宰府天満宮
そここの茶店より名物梅ヶ枝餅をとなへて【客を】呼びとむにやかましき。
涼しき池の辺に坐して糧つかふに、いつの間にか鯉は人ありと知りて群り来り、今に餌やなげらるるかと思はざたり。

4日目：福岡～八幡～下関～山口

- ⑫博多駅発
汽笛一声と共に名残惜しき福岡の地を後にして…
- ⑬八幡製鉄所
黒煙は濛々として天を蔽ひ、数多の工場よりは雷の如き音聞こえ、人為の致す所とも思はれず…先づ第一に導かれたるは鉄材製錬所にて、殷紅の鉄材遙か彼方より遠雷の如き音たてころがり来るよと見るや、絶間なく廻転せるルーラーの間に入り、轟々たる大音を発し、火花を四方に飛び散らして出づ。

※【 】内は教師による添削。

当時、山口 - 小郡間には軽便鉄道が通っていました。朝5時半に山口駅（後の亀山駅、現中国電力山口支店付近）を出発します。早朝の静けさの中、汽車の音が響きます。人々が起きだして聞こえてくる音は、汽車以外に大きな音のするものがないことがわかります。

下関では雑踏が描かれ、ターミナル駅の賑わいを感じさせます。関門海峡では風と波の音に加え、大小さまざまな帆船、汽船の行き交う音も聞こえてきます。

森閑とした香椎宮から箱崎までは、春の景色を楽しみながらの徒歩移動でした。東公園では県内屈指の（と当人は思っていたであろう）亀山公園と比較しているあたり、同園の佇まいにいたく感動したようです。

博多では、共進会と市街の繁盛に圧倒されたく、イルミネーションや装飾の美しさが言葉を尽くして説明されます。この共進会に合わせて開通した福博電気軌道（箱崎口-黒門橋/呉服町-博多停車場前）についての記述も多く、煙の出ない、新しい動力の乗り物に対する興味がうかがえます。



本人が描いた共進会場図

太宰府天満宮は現在よりも様々な音が溢れていたようです。「やかましき」と言われるほどの客寄せは現代ではなかなか想像が付きません。江戸時代以来の寺社参詣の賑わいがあります。

最終日に見学した八幡製鉄所では、近代産業技術に圧倒された様が、繰り返される轟音の表現や、製鉄過程の細かな描写等からうかがえます。九州への旅は、穏やかな春の景色と名所旧跡を楽しみつつ、近代日本を体感する旅でした。

全編を通して、筆者は汽車の音を旅の音と受け止めていたようです。小郡から西へと向かうとき、博多から山口へと発つとき、旅の節目は汽車の音に彩られます。名所旧跡めぐりは過去へ、共進会や製鉄所の見学は未来へ、それぞれ思いを馳せる旅でもあります。回転する車輪の音は時間を巻き戻す音にも進める音にも聞こえたのかもしれませんが。